



同志社人物誌 (10)

中村 栄助

高山 義三

野先生であつたからである。

同志社と父との関係は、父自身が回顧録『九拾年』において語るところによれば、「私と同志社との関係は、私が新島先生を識るようになってからであるが、しかし、正式に同志社という一つの教育団体の一人に加わつたのは、同志社の社則が制定された明治十六年二月以後のことである」という。嘉永二年（一八四九年）に生れた父が、はじめて新島先生に接し、先生のキリスト教精神に深く傾倒してその生涯の方向を決定づけることとなつたのは、父の二十才であり、また、右の社則制定によつて、先生とともに同志社運営の最高責任を負う五人のうちに加えられたのは、父の三十四才のときであつた。

以来、同志社と父との縁は、父の最後の日まで絶えることなくつづいたが、とくに晩年にいたつて、すでに一切の公職を辞した父も、ただ一つ同志社理事の職だけは心から大切に、務めていた。父にとっては、新島先生がなくなれる直前に、「中村さん、同志社を頼みますよ。今後の同志社のため、私に代わつて十字架を負うて下さい」といひのこされたお言葉が、終生忘れられなかつたの

去る二月十四日、名誉市民故牧野虎次先生の同志社栄光館における京都市公葬の当日、亡き先生の前に最後のお別れの言葉を申し上げ

一
げつつ、私の心は遠く父の告別式の日の模様を想い起さずにはいられなかつた。私の父中村栄助は同志社社葬の榮譽を与えられて生涯を閉じたが、そのとき父に対して切々胸をうつ告別の辞をいただいたのが、ほかならぬ牧

であろう。そして、先生から賜わったこの知遇を無上の光榮として、私どもにも語りきかせた父であった。

二

父が新島先生の教えを乞うにいたったいきさつには、一つのエピソードがある。

商人の子として生れた父は、「素町人のせがれ」であることを誇りとする反骨的精神をそなえていたが、徳川幕府が倒れ、明治の新时代を迎えて、若い日の父の胸は、実業界における雄飛を夢みて、一段と大きくふくらんだ。そのころ、行灯時代もそう永くはあるまいと考え、ポツリポツリと現われかけたランプに目をつけた父は、知人とはかつて、石油の取引をはじめ、さらに英米商社からの直接買付に乗り出した。しかし、なにぶん貿易に関する知識が一般的に乏しかった時代であったせいもあるうか、やがて外国商社との間に取引契約をめぐって悶着を生じ、和解がえられないままに、イギリス領事の裁判にゆだねられることとなった。ところが、その結果は、勝訴を固く信じて疑わなかった父の期待に反して、父側の敗訴に終った。

このときの全く憤懣やるかたのない父の心情は、その直後に事件の代言人との間に交わされた問答の記録のなかに、如実に語られているが、はからずもそのやりとりの言葉のうちに、天の啓示ともいうべきひらめきを、父は見出したのである。すなわち、代言人から、西洋では裁判の開始前に聖書に手をおいて虚偽の申立てをしない誓いをする習慣がある。この裁判でも外国商社側はその誓いにしたがい自己に都合の悪かった点も白状したのに反して、父側は、本来勝つべき理由をもちながらも、その申立てにしばしば虚偽や粉飾を交えた事が却って意外な敗訴をまねく事になったと聞かされた。

代言人の言葉は、その推測の当否はともあれ、父にとつては、父みずから語ったように、「少なからぬ驚き」であった。というのは、由来日本の商人は、しばしば、相手に嘘をいい、相手をごまかしてこそ商売ができるものと考えていた宿弊から、いまだ脱却するだけの段階に立ちいたつてはいなかったからである。だが、その驚きこそ、父をしてキリスト教の研究へとみちびき、程なく、当時、アメリカから帰つてこられたばかりの新島先

生の門をたたく機縁ともなったのである。

三

先生との初対面の日に、父はもつとも強烈な印象を受けたようである。その日、キリスト教への父の回心がはじまったのであるが、それと同時に、当時、先生が多年の宿志である同志社大学設立のため、文字どおり東奔西走されていたのを助け、父もまた、設立募金運動に力のかぎりをつくすこととなった。

父の気持としては、「それは、止むに止まれぬ、先生に対する衷情であり、大いなる思慕」に発する献身にほかならなかった。

しかし、同志社大学設立運動の前途には、困難な問題が山積し、それは戦後の新制大学づくりとは比べるべくもなかったであろう。しかし、この運動がやつとその軌道にのろろとするかに思われたとき、不幸にも一大打撃をこうむった。明治二十二年の初冬、運動に奔走の途次、上州で感冒にかかれた先生が、永年の過労もあり、同志社の全校のものの、涙を流してのご回復の祈りも空しく、ついに亡くなられた。前述のように、このとき

「同志社のため、十字架を負う」決意を固めた父はもちろん、先生の遺志をついだ人々の懸命の努力にもかかわらず、主柱を失った大学設立運動は、先生のご永眠後、一大頓挫を来した。

その後もさらに打ちつづいた困難のもとに、さながら窒息せしめられたかにみえた運動が再興されたのは、明治四十年初頭のことであり、ついに四十五年四月にめでたく大学の開校をみるにいたった。理事として「五月二十日の盛大なる開校式に列した私は、二十二年往時を追懷して感慨実は無量であつた」と、父は述べているが、当時の父の喜びの姿は、私もまたよく記憶するところである。だが、同時に、「ことに、新島先生をしのぶとき、ただ胸がせまるのみ」と、まず亡き先生に想いをはせる父であつた。

四

ついに、宿願は達せられた。人々の敬びとともに、さらに、先生の遺志である大学の完成を目ざして、明るい希望が同志社にあふれたのは、当然であつたであらう。

しかし、その後はどなく、学内に暗雲が低

迷しはじめ、やがて大正六年から約一年半の間、同志社は大紛擾に陥つた。実は人間関係のもつれが紛擾にまで発展したのは、同志社にとってこれが二度目の不幸な経験であり、さきには新島先生の没後、大学設立運動が徴兵猶予の特典取得の困難に直面した際に生じたものであるが、そのときも、父は社員総代として事態の解決にあたるとともに、さらに小崎総長の辞任のあとをうけて、しばらくの間、総長代理の任についたのであつた。

この再度の紛擾の後をうけて、奇しくもまた、父は総長代理の任につくこととなつた。すなわち、大正八年一月、原田総長の辞任の後父は翌年三月まで紛擾の余波の処理にあたつたが、海老名新総長の就任によつて「私もやつと重荷を下した」と父は述懐している。さぞかしむつかしい問題も多かったことであろう。そのころ私ども家族の間では、「同志社は騒動がもち上ると、お父さんを総長代理に引張り出しなされる」などと冗談まじりの会話がかわされたが、それらの言葉が耳に入つたのか入らなかつたのか、父はただ誠心誠意、その「中継ぎ総長」の任務に邁進した。恐らく、父の心からは、片ときも新島先生の

「中村さん、頼みますよ」というお言葉が忘れられなかつたのであらう。

だが俗に「二度あることは、三度ある」という。その後いまだ一度、父は総長代理を務めることとなつた。

右の事件のあと、同志社は平穩に立ちかえり、さらに目ざましい発展をつづけたが、昭和三年秋の御大典に際して、意外の不幸事が突発した。というのは、折から天皇のおとまりになつていた禁裏に最も近い同志社から失火したことであつた。その責任をとるため、海老名総長をはじめ理事一同は総辞職したが、父だけは残務処理のために、ここにまたも総長代理を仰せつかつた。ところが、海老名総長の辞任から事態は、思ひぬ方向に発展し、翌年四月の「同氏の送別会はたちまち学生大会となつて、学内の空気は爭議化し、それに、反新理事派の教授連中も起つたという有様で、学校は創立以来かつて見たことのない大騒動の中に投げこまれる」にいたつた。総長代理として、その台風の焦点に立つた父は、「誰がよいの、誰が悪いのというよりも、私はただ悲しかった」とその心境を述べているが、それはどんな嵐がやってきても先

生の遺業だけは護らなければならぬという、不退転の決意に通ずるものであり、父はこの決意をつらぬき通して事態を処理した。紛擾のつづいた間、父は日ごろは身につけたことのない先生の遺品のズボンを出させ、モーニングを着こんで登校したが、それは父がひそかに命を賭する覚悟であったことを物語るものであった。このようにして、父は同志社本部の理事室に頑張りつづけ、そして、人なきときには、祈り通した、いかにもキリスト者にふさわしい父の苦斗の姿であった。さしもの大紛擾も夏休みに入ってから、いつの間にか火の手は消え秋には新しい総長を迎えて、父はまた第一線の任から退いた。それから一年後、十一月二十九日の同志社創立記念日に際して、湯浅一郎画伯の筆になる父の肖像画の除幕式が学校で挙行された。そのおさえきれぬ喜びのさなかにも、まず新島先生のご恩顧に感謝するとともに、どれだけ私が同志社のため尽したかを振りかえって考えると、むしろ汗顔のいたり恐縮する父ではあったが、すでに八十路にふみ入った父の心に去来する感慨は、まことに言葉につくしえぬものがあつたであらう。

昭和十二年の初夏、父はそのころすでに衰弱していた病軀を抱きかかえられるようにして、同志社を訪れた。それは父の切なる希望によるものであつたが、このときたしか、父にとつて最後の同志社訪問であつたと私は記憶している。

それから半歳、十一月十七日、父は神に深い感謝をささげながら静かに世を去つた。いま父は若王子山上に、新島先生のお墓と並んで眠っている。

五

父に関しては、なお実業家として、あるいは政治家としての生涯をも語らなければならぬであらうが、ここではただ、父が三十三

才で京都府会議員となり、また初代の京都市会議長をもつとめ、あるいは、明治二十三年国会開設による初の衆議院の総選挙に立候補し、議員に選ばれたことを、あげておくにとどめる。これら公人としての活動のうちにあって、とりわけ父がその心魂を傾けつくし、

あらゆる困難を克服してついになしとげた事業として、七カ年の歳月を費した疎水工事がある。ひところ私が南禅寺の市長公舎に住居

したときには、散策の折にあの三条蹴上のトンネル口のほとりにたたずんでは、若い日の父の抱いた京都市発展に対する烈しい情熱と不屈の苦斗とをしのぶことを日課とした。

私の父を知り、また父を語る人々は、しばしば父を指して「かがやかしい履歴書」の持主という。たしかにそのとおりであるといえよう。しかし、私にとつて、また家族たちにとつては、それらの経歴にもまして、父のキリスト者としての心、その心をもつて終生きびしい修養を怠らなかつた父の姿こそ、最も貴いものにほかならなかつた。このことは、いまも變るところはないし、私ども家族はそのような父をもちえたことを、わが家の大きな誇りとしている。

いま私の居間の欄間には、父の写真が母のそれと並んで、静かに私の日常を見おろしている。そのやさしい眼差しに、私は在りし日の数々の教えとともに、無言の励ましを見出すのである。

(京都市長)